

# 食事がてらに、

## ちょっとお勉強。

なぜ、あんな色になるんだろう？

緑つぼくっても青磁？

青磁と青瓷は違うの？



青磁っていろんな種類がある？

いつの時代から  
日本にあるんだろう

天龍寺青瓷？ 砧青瓷？

## 「加藤溪山」展～青瓷の美～

■2013年9月1日(日)～10月31日(木)

■高島屋大阪店 なんばダイニングメゾン9階 エキウエミュージアム

加藤溪山を  
もっと知りたい。

### 初代 加藤溪山 (1879～1962)

1879年(明治12)、焼物の町・岐阜県多治見市に生まれる。地元の西浦焼の窯元にて、陶芸を開始。後に、京都に出て、五条坂の四代清水六兵衛に入門。1912(大正元)年、五条坂に開窯。青瓷を愛し青瓷を研究し、青瓷を中心に作陶活動を行った。

### 二代 加藤溪山 (1913～1995)

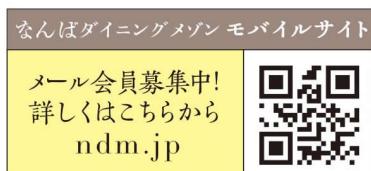
1913年(大正2)、初代加藤溪山の長男として京都に生まれる。1963年(昭和38)、二代加藤溪山を襲名。その秋に、京都大山崎に築窯する。1964(昭和39)年、紺受褒章を受章。生涯に亘って、高島屋での個展開催にこだわった。

### A

初代 加藤溪山  
天龍寺青瓷獅子耳花瓶

### 三代 加藤溪山 (1948～)

1948年(昭和23)、京都市に生まれる。1972年(昭和47)、日展初入選。以降9回入選。1973年(昭和48)、京都市芸術大学工芸科陶磁器専攻卒業。1996年(平成8)～1997年(平成9)、三代加藤溪山襲名記念展を開催。初代、二代同様、青瓷にこだわり作陶にはげむ。



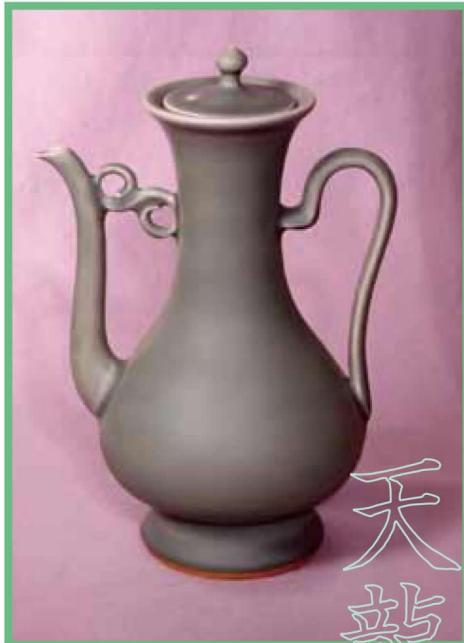
NAMBA  
DiNiNG MAiSON

なんば ダイニング メゾン  
インフォメーションダイヤル:06-6633-1244  
(10:00～21:00)

# 「加藤溪山」展～青瓷の美～

■2013年9月1日(日)～10月31日(木) ■高島屋大阪店 なんばダイニングメゾン9階 エキウエミュージアム

今回は、初代から三代まで“青瓷の美”に惹かれた「加藤溪山」の作品を特集。中国の宋に源流を持つ「天龍寺青瓷」や日本人に入気の「砧青瓷」などが登場します。エキウエミュージアムでは、その魅力をパネルなどで、楽しくわかりやすく解説します。



B 初代 加藤溪山 天龍寺青瓷仙蓋瓶形水注  
**天龍寺青瓷**

透明感のある深い緑色の青瓷を、天龍寺青瓷といいます。元から明の初頭にかけて、龍泉窯で焼かれた青瓷の俗称です。室町時代に足利尊氏が、天龍寺造営のため、中国に貿易船（天龍寺船）を派遣し、その船で持ち帰った青瓷を、当時茶人たちの間で天龍寺青瓷と呼ぶようになりました。また、京都の天龍寺にある、大きな牡丹唐草の青瓷の色を指しているとの説もあります。

## 砧青瓷

青瓷には、緑と青の2系統があり、日本人は淡い青を砧の名で愛好してきました。雨後の青空にもたとえられる青瓷は、中国の南宋時代、浙江省の龍泉窯で焼かれた青瓷に対するわが国での俗称です。語源については、千利休が茶会の席で鰯耳の青瓷の花生のヒビが、鎌で留めてある姿を見て「砧で絹をうつ響きがある」と言ったとの説が知られています。また、京都の慈照院にある花生が、絹を打つ砧の形に似ていることでこの名前がついたとも。日本人は、淡い青を砧の名で愛好してきたのです。

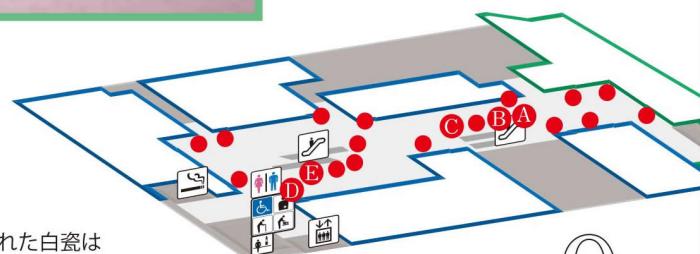
C 初代 加藤溪山 砧青瓷四方式盛器



E 二代 加藤溪山 牙黄磁尊花生

## 牙黄磁 (がおうじ)

宋代きっての名窯の定窯で焼かれた白瓷は「定白」と呼ばれるまでの逸品で、象牙色をしていました。二代溪山がその美しさを復元しようと試行錯誤を重ね、優美なアイボリーの発色に成功しました。



なんばダイニングメゾン 9階

なんば/  
高島屋 7・8・9F  
レストラン 夜11時まで

NAMBA  
DiNiNG MAiSON

なんば ダイニング メゾン

インフォメーションダイヤル:06-6633-1244  
(10:00~21:00)